

「県庁の星」による和歌山大学の産学連携取組事例

○高井廉之（和歌山大学 地域創造支援機構）

はじめに

和歌山大学は和歌山県における唯一の総合大学であり、地域を支え、地域に支えられる大学として産学連携・地域連携に取り組んでいる。私は、平成6年に和歌山県庁に入庁して以降、様々な職務を経験し、産業振興のセクションにおいて4年間、主に県内企業をサポートする業務に従事した後、平成22年4月1日付け辞令により和歌山大学に派遣出向し現在に至る。これまでの私の本学での取組事例の紹介と、今後の産学連携のあり方について考察する。

県内産業の概要

大手鉄鋼、石油関連の大手企業がある一方、繊維を中心とする地場産業が地域の雇用を支えている。また、小規模企業（製造業従業員20人以下・サービス業従業員5名以下）の比率が90%と全国平均の87%を上回っており（総務省「事業所・企業統計」2006）、いわゆる大手の下請企業が大多数を占める。一方で、繊維産業に由来するオンリーワン企業、ニッチトップの企業も少なからず存在する。総じて、元請企業の海外拠点シフト・円高等のリスクを抱える下請企業の自社製品開発・イノベーションが課題である。

取組事例①「産学官交流会」の発足

本学に赴任して、まず手がけたのが、研究者と地元企業との交流事業である。産学連携においてはシーズ・ニーズとのマッチングが重視されるが、人と人とのつながり、つまり双方の担当者の相性・モチベーションレベルなどがより重要な要素であり、たとえシーズとニーズがマッチしても連携が進むとは限らない。逆に人と人との結びつきが強くなれば、たとえシーズとニーズに多少ズレがあったとしても双方のモチベーションが十分補完できるとものと考ええる。

また、県内企業の経営者、技術者にとって、和歌山大学は近くて意外と遠い存在である。企業経営者からは、そもそもどんな研究をしているか知らないという声も聞く。大学が持つ独特な敷居を下げる意味でも、まずは和歌山大学を知ってもらうという仕掛けが必要と考えていた。

以上を念頭に、昨年7月に「和歌山大学産学官交流会」を発足し、長期的な交流を念頭に特に若手の研究者と企業経営者との人的交流に重点を置いた。

具体的な企画としては「まずは知ってもらう」ために研究室等を見学する見学ツアーと、より専門的な分野にフォーカスしシーズを提供するため、ロボット技術、情報通信などテーマごとにプレゼンテーション会を開催した。

取組事例②「シーズ・マトリクス」の提案

本学を含め各大学の産学連携のセクションにおけるwebページには研究シーズを紹介する

